

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

インソムニア (Insomnia)

2002 (平成14) 年8月27日鑑賞

Data

監督：クリストファー・ノーラン
出演：アル・パチーノ／ロビン・ウィリアムズ／ヒラリー・スワンク

👁️👁️ みどころ

敏腕刑事アル・パチーノは、少女殺しの犯人ロビン・ウィリアムズを追いつめていく。これに協力するのが、新米女性刑事のヒラリー・スワンク。3大アカデミー賞スターの競演によるスリリングな犯人捜しも興味深い、ストーリーはもっと複雑でネタが多い。アル・パチーノが抱く心の葛藤は、白夜のアラスカでのインソムニア（不眠症）のために日々増幅されていく。果たしてその結末は……。緊張感をもって楽しめる名作品。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<インソムニアとは>

「インソムニア」とは「不眠症」のこと。殺人事件の舞台となったアラスカのこの町では、白夜が続く時期は何日も太陽が沈まない。従って、ロスから応援にきたベテランの腕利き刑事ドーマー（アル・パチーノ）は、捜査のイライラやストレスも合わさって全然眠れない。いかにタフな刑事であっても、窓から差し込む明かりが、いかに睡眠という人間にとって最も大切な休養を阻害するかが、この映画の全編を流れるテーマとなっている。

そして、アル・パチーノはさすが名優。①敏腕刑事の顔だけではなく、②秘密の過去を持ち、今回も犯人追跡劇の中で相棒のハップ（マーティン・ドノバン）を誤って自分が撃ってしまったことを打ち明けられず、苦悩し葛藤する刑事、そして③毎日眠れない夜を過ごす中、次第に憔悴し、うつろな目になっていくインソムニアの刑事を見事に演じている。

<発端は少女の殺人事件>

コトの発端は、撲殺の跡を生々しく残しながら、髪を洗われ、爪を切られた17歳の少女の死体が、ゴミ置場から発見されたこと。この少女殺しの犯人のフィンチ役は、何とあ

の名優ロビン・ウィリアムズだ。フィンチは作家で、被害者の少女はそのファンだった。そして、少女の部屋には高価なブランドの服やネックレスが残っていた。二人の仲はどこまで進展していたのか・・・？

一方、少女の彼氏は同級生のランディ（ジョナサン・ジャクソン）。従って、彼女が年上の「オッサン」と秘密の「援助交際」をしていたことをランディは怒る。しかし、ランディも女に手が早い。何と彼女の「親友」の女の子とデキていた・・・。

敏腕刑事ドーマーの合理的な「読み」と、意表をつく捜査の成果として、このような事実関係が次々と明らかになった。そしてドーマーと、被害者の少女が崇拜する作家フィンチとの対決がいよいよ迫った・・・。

＜犯人の興味深いキャラクター＞

ロビン・ウィリアムズが演ずる、この殺人犯フィンチの人物像は非常に面白い。彼は本物の作家だから、相当のインテリ。そして、決して根っからの悪人ではない。単に、自分を崇拜するファンの女の子とデートを重ねているうちにデキてしまった（？）だけだ。そのこと自体は、まあ倫理上は問題があるとしてもそれほど悪いことではない。また、彼氏、彼女を巡るトラブルもよくある話。そしてその痴話ゲンカの延長で暴力ザタになることもあるだろう。しかし、フィンチの場合は・・・。

「オッサン」と会うことがバレた被害者の少女は、ランディから暴力を受け、その場を飛び出し、その救いをフィンチに求めてきた。泣きじゃくる自分のファンの女の子。フィンチは思わず女の子の身体を抱きしめた。そして自然に次の行動に・・・。するとその時・・・。何とその女の子はガラガラと笑い出したのだ。女の子には、フィンチに対してそんな気はさらさらなかったのだ。自分の気持ちのカラ回りを悟り、焦るフィンチ。そんな純情な「オッサン」を17歳の女の子は馬鹿にしたかのようにガラガラと笑い続ける。さあ、フィンチの気持ちは・・・。フィンチは笑い転げる女の子を殴った。何回も何回も。すると女の子は静かになりグツタリと・・・。少女の生命はいとも簡単に失われてしまった。ただそれだけのことだ。

フィンチは、自分を追跡してくるドーマーとの船の中の2人だけの会話でこの秘密を打ち明けた。ドーマーとの「取引」が成立することを確信していたフィンチは、さらに少女が死んだことを知った後、冷静になった自分が、少女の髪を洗ってやり、また爪を切ってやったことも打ち明けた。

法的に見れば、これは殺人罪になるかどうか微妙、傷害致死罪は確実といったところだ。フィンチが悪いのは、その後の「死体遺棄」と「証拠隠滅」行為。そして、頭脳犯フィンチの面目躍如たるところは、ドーマー刑事が、同僚のハップを撃ったという弱点を最大限利用し、ドーマーと「取引」しようとしたことだ。そのうえ、フィンチの立てた作戦や行

動、そしてドーマー刑事に対する説得の仕方や、切り札としてのテープへの録音などは、実にインテリジェンスに富んでいる。

ドーマー刑事がその勧誘に乗り、フィンチのペースに入りこんでいく必然性が、2人の名優のやりとりの中で十分に理解できる。そして、フィンチのペースに輪をかけるのがドーマー刑事の不眠症。眠るために、差し込む光と「格闘」しながらも、眠れぬ夜が続き、日々憔悴していくドーマー刑事。

<新鮮な魅力、ヒラリー・スワンク>

この2人のベテラン男優の中に入って、新鮮な魅力を発揮するのが地元の町の新米刑事エリーを演ずるヒラリー・スワンク。彼女は、崇拝するドーマー刑事の指示に従ってイキイキと捜査に参加していたが、犯人を追いつめ、小屋に突入した後の犯人逃走劇の中で、地元の警官が負傷し、さらにハップが死亡するという悲劇に遭遇した。そしてハップ死亡の原因を調べる役割をもらった。エリー刑事は、地元の警官に続いてハップも、逃走する犯人から射殺されたという報告書を書いていたが、そのうち、「ハテナ・・・？」と考え込んだ。「なぜ、こんな方向から弾丸が当たっているのか？」という疑問が湧いてきたのだ。崇拝していたドーマー刑事に対して、初めて素朴な疑問をもつエリー。そのうえエリーの質問に対するドーマー刑事の答えも不十分だ。「はて、これはどうしたことか・・・？」。エリーは、ドーマー刑事から習ったとおり、地道な捜査を続け、合理的な推論を重ねていった。その結果エリーがたどりついた結論は・・・。

<フィンチのワル知恵、そしてその行方は・・・>

フィンチがドーマーにもちかけた提案は、かなり巧妙なもの。つまり、フィンチとドーマーに何の接点もないことは、2人がしゃべらない限りバレないことを前提に、①犯人は、被害者の少女が「援助交際」していたことに腹を立てて、これを殴り殺したランディとする、そして②ハップ殺しも、逃走中のランディから撃たれた弾によるものとする、というものだ。このフィンチの誘いに、不眠症が続くドーマー刑事も完全に乗ってしまった。そしてランディの逮捕。「これによって一件落着」となった・・・筈だった。

しかし、今やエリー刑事は完全にドーマー刑事に疑惑の目を向けていた。そして、利口なフィンチはこれを察知した。そこで、フィンチはエリー刑事の「口封じ」もやむなしと判断。さあ、最後の展開はどうなるのか・・・。

<構成の面白さと名演技に拍手>

アル・パチーノ、ロビン・ウィリアムズ、ヒラリー・スワンクの「3大アカデミー賞スター初競演」というふれ込みどおり、3人の熱演は迫力があるし名演技だ。そして単なる犯人捜しではなく、スネにキズをもった過去のある敏腕刑事の心の葛藤と、ちょっとした

援助交際のもつれで殺人事件の犯人となってしまった人気作家とのかけひきが面白い。そして、アラスカの白夜のためのインソムニア。よく練りあげられた構成だ。

それにしても6日間も眠れなかったら、私なら一体どうなるだろう・・・。

2002（平成14）年8月30日記